「象牙の塔」を出る「苦悶」

——魯迅と厨川白村に関する再検討——

陳　朝輝

一．はじめに

一九二〇～三〇年代中国文芸思潮の流れを見渡すとき、ある文学論の消長が目を惹く。それは魯迅（一八八一～一九三六）訳『苦悶の象徴』[1]の大ベストセラーをきっかけに、民国文壇に現れた厨川白村（一八八〇～一九二三）ブームが、またたく間に、その後に勃興する革命文学論に抑えられ、姿を消していく光景である。作者「個人の苦悶、懊悩を前面に出して創作する」[2]ことを主張する厨川白村文学論と、作者の社会的な関心を根底におく革命文学論とは、本来相容れないものであるが故に、この潮目の入れ替わりのような現象は、近代中国文学史における一つの大きな断絶ないし転換点と見做される傾向にある。それにしても誰よりも厨川の文学論に惹かれ、また実質上革命文学論争の中心でもあった魯迅において、この二つの文学論はいかなる関係を切り結んでいたのだろうか。とくに魯迅の関心がその後次第に日本プロレタリア文学へと移っていくプロセスにおいて、厨川の労働文学論が果たした前史的な役割は検討に値しよう。

ところで周知のように、魯迅と厨川白村に関しては、すでに多くの先行研究[3]が見られる。しかしその多くは両者の共通点の発掘や、或いは例えば『野草』などの作品に見られる魯迅文学への厨川の影響解明[4]などに関心が集中しており、

ここで筆者が提出した問題への言及は、意外と少ない。とりわけ「東せんか西せんか、北せんか南せんか。進んで新しきに就くべきか、退いて古きに安んずべきか。霊の教ふる道に就かんか、肉の求むる所に赴かんか。左顧右眄しつつ十字街頭にさまよへるものこそ現代人の心である。"To be or not to be, that is the question."われ年四十を超えてなほ人生の行路に迷ふ」[5]と語った厨川の「苦悶」する一面は、あまり留意されて来なかったといえよう。

しかし「象牙の塔を出て」社会問題に関わっていくのか、それとも「象牙の塔に」閉じ籠もって外の社会に無関心でいるのか、という厨川の「苦悶」を理解することは、一九二〇～三〇年代の魯迅文芸思想の変遷に対し、より立体的な理解を構築するための一助となるであろう。また、「ロシア革命のインパクトによって、『新青年』の同人が陳独秀・李大釗系の〈共産主義的革命分子〉と、胡適らの〈改良民主主義〉派に分化していったとき」に、「個々人の覚醒をすべての変革の前提であるとする実篤流の人類主義」[6]にまわった魯迅が、その後どういうプロセスを経て、「マルクス主義的」な文学者へと変身していったのか、という問題もより明白に解明できることであろう。

二、厨川白村とその時代

まずは厨川白村の文学的な営為を、彼の伝記とともに当時彼が置かれていた時代背景に還元して、モンタージュ方式でみておくことにしたい。

一、厨川白村の為人

厨川白村の本名は厨川辰夫で、「血城」や「泊村」などの号も使ったことがあるが、文筆活動においては主として「白村」を使っていた。『近代文学研究叢書』（第二二巻）によると、白村は明治十三年（一八八〇）十一月に、「京都市中京区柳馬場押小路上ル所に父磊三、母セイ（和田氏）の長男として生まれた」[7]という。また、「白村の家族や親しい人々

の間では辰夫は養子であったという説も」（二七六頁）記されている。これは恐らく事実だろうと思うが、しかし養子とは言え、白村の青少年期の人生に何らの不幸も与えなかったようだ。むしろ「一人児であったから、両親の心遣ひは、並大抵ではなかった」（二七七頁）ようで、父磊三も長崎で蘭学を習っていたとき、伊藤博文などとも交際があったほど社会で活躍し、京都府の勧業課や大阪の造幣局などに勤めた人物であったため、白村の成人までずっと余裕のある生活基盤を保障してくれたという。毒舌的な批評文に見られるやや「傲慢」[8]な白村の性格は、この恵まれた家庭の境遇とも或は関係していたのかもしれない。もちろん単に家庭環境に恵まれただけではなく、白村自身も大変優秀な人であったと思われる。十七歳で京都府立第一中学校を卒業した後、第三高等学校へ入学し、さらに明治三十四（一九〇一）年に二十一歳で東京帝国大学英吉利文科に入学している。また、中学の時代から「学友会誌」などに短文を掲載するほど、文学的な才能においても頭角を現していたという。このように聡明で勤勉な白村は大学でも成績が優秀で、明治三十六年（一九〇三）に特待生となり、翌年卒業する際、優等生として恩賜の銀時計をも拝受していた。そのときの心情について、白村本人は以下のように記している。

○本日大学の卒業式これあり、天皇陛下臨御あらせられ候て小生は文科大学卒業生総代として先づ学長より卒業証書を受け再び又卒業優等生として陛下の御前に出で侍従の方より恩賜の銀時計を拝領いたし候。式場に在ては小生常に陛下の向側に直立し拝領の折は玉座を距る僅か二間軒許の所まで進み出で最敬礼を行ひしに陛下は竜顔いと麗しく軽く御会釈あそばされ候ひき、此の身にあまる光栄……（二七九頁）

恐らくこれが大きな励ましになったのだろう。白村は学部を卒業した後、そのまま大学院へ進学し、夏目漱石の指導のもと「詩文に現われたる恋愛の研究」をはじめることになった。

しかし詳細な事情は知られていないが、この時期には厨川家の事情が既に様変りしていたようだ。「弊衣破帽粗食に甘んじ」る白村がしばしば人目についたし、学資を補うために、学業の余暇、外国人に日本語を教えるために出掛ける

姿もよく見かけられていた。それでもとうとう大学院に留まることが許されず、進学して間もなく、学生生活にピリオドを打って、熊本第五高等学校へ赴任することになった。

家では一人っ子として愛され、学校では恩賜の銀時計を授かるほど優等生であった白村は、恐らく孤高な性格を控えようとする意識が毛頭なかったのだろう。教壇に立って間もなく、学生の中ですでに辛辣な皮肉で有名になっていたと教え子たちが後に回想している。しかしその分「教室に於いては無駄話一つ」もしないほど責任感も強かったという。講義の内容も「そのまま筆記すればすぐにも堂々たる書物になる」（二八一頁）ほど整然としていた。

このような密度の濃い講義が多分ものを言ったのだろう、明治四十二年（一九一二）に「十九世紀後半から二十世紀のはじめにかけて五六〇年間にわたる欧州文芸思潮」（二八一頁）を通論した処女作『近代文学十講』を世に問い、その後「〇〇十二講」「〇〇十講」という題の書物が続出するほど、出版界に大きな影響を与えた。これを皮切りに、白村の文学的な生命は最盛期を迎え、単著だけでも『文芸思潮論』（大三）『印象記』（大七）『小泉先生そのほか』（大八）『象牙の塔を出て』（大九）『近代の恋愛観』（大十一）などが陸続と出版され、欧米近代文学を体系的に紹介する学者として、また文芸思潮を背景にした文明批評家としても、その名を発したのである。

学者としての実力と文人としての才能を大いに生かし、順風満帆に世に滑り出した白村はその内心において、文学に無理解な俗衆に対してかなり孤高な態度を取っていたようだ。例えば一九一五年、左足が黴菌に感染し、切断手術を受けたときに、「白鷺の孤高清節にあやかりたい」「隻脚の俗衆と異なるだけでも禁じがたい一種の愉快を覚えるのである」[9]と述べていた。しかしこの言葉が禍を招いたわけではあるまいが、一九二三年の関東大震災で、この不自由な足のために、白村は津波から逃げられず命を落としてしまうことになる。だがそれはひとまず置こう。

それより筆者が注目しているのは、晩年の白村が左足を切断したにもかかわらず、翌一九一六年米国に遊学し、その後第一次世界大戦の影響で渡欧を断念して一九一七年七月に帰国してからというもの、白村の批評姿勢にじわりとある

種の変化が現れはじめ、また一つの問題が常に彼の関心を引き寄せるようになったことである。

二．労働問題・労働文学へ目を向け始めた白村

その変化とは、アメリカ遊学から帰ってきた白村がしばしば「『藝術の宮』を離れ『象牙の塔』を出て、社会問題と経済問題を論じ」[10]るようになったことであり、その問題とは当時の労働問題、労働文学のことである。一九一九年十月、雑誌『改造』に掲載した「労働問題を描ける文学」[11]がこの問題を議論した最初の文章であり、それを皮切りに、翌年さらに「象牙の塔を出て」（『朝日新聞』一九二〇、三）「無産者の涙」（『解放』一九二〇、四）「藝術より社会改造へ」（『大観』一九二〇、六）などを次々と発表し、積極的に社会問題、労働問題を議論するようになっていった。

○生来の鈍根と不勉強とで私にはろくな仕事は一つも出来ない。ラスキンのやうな立派な文章も書けなければ、あんな大きな頭で自然と人生を観照する力もない。矢張り一個の村夫子に過ぎない。幸ひ身の程は知つてゐるから、矢張り文藝の研究という小天地にいつまでも燻つてゐる積りである。積りではあるが、それでも今の日本の社会を見て居ると時々腹立たしくなる。……私なぞが『象牙の塔』からいくら飛び出して見たつて知れたものだとは百も承知してゐながら……ちよと『象牙の塔』から首だけ出して、こんな物も書いて見たくなる。[12]

これまで孤高を誇っていた白村の文学的な関心になぜこのような変化が生じたのであろうか。それはやはり当時の世界および日本の社会情勢と相関しているだろうと思われる。下図は筆者が幾つかの「文学年表」「歴史年表」[13]を参考にして、一九一六年～一九二三年の間の日本文化・社会状況をまとめたものである。

年代	事項
一九一六年	①『坑夫』（宮嶋資夫）発表　②「民衆藝術の意義及価値」（本間久雄）が論争を引起す　③山川均が『新社会』『中外』に投稿　④『労働組合』が発行　⑤職工組合組織が発足し『工場生活』を発行　⑥工場法施行により老病職工の

	不当クビ頻出　⑦片山潜がアメリカより『新社会』に投稿。
一九一七年	①特集『早稲田文学』「民衆芸術に就いて」　②ベルリンで三十万の労働者がストライキ　③ロシア十月革命　④長崎三菱造船所にストライキ。
一九一八年	①民衆藝術の問題が盛んになる　②『労働新聞』発刊　③『労働と文芸』創刊　③新しき村　④労働文学の機運が台頭　⑤米騒動　⑥建設者同盟が組織される　⑦「藝術の社会的価値」（本間久雄）
一九一九年	①『労働文学』創刊　②モスクワ第一回コミンテルン開会　③『社会主義研究』創刊　④『解放』創刊　⑤普選運動への関心が高まる　⑥『日本労働新聞』刊行　⑦中国で五四運動　⑧『労働運動』創刊　⑨『早稲田文学』特集「文芸家と為政者との接触を如何にみるか」　⑩『新潮』（九～十）特集「文壇諸家の見たる労働問題」「社会改造と文芸」　⑪日本労働党が結党。
一九二〇年	①「中間階級の文学」（片上伸）　②「文芸と問題」（有島武郎）　③『労働問題』関西版発刊　④日本初のメーデー　⑤日本社会主義同盟が創立し、機関紙『社会主義』を創刊　⑥「日本労働劇団」が誕生
一九二一年	①『種蒔く人』創刊　②『労働者』創刊　③神戸三菱及び川崎造船所争闘
一九二二年	①アジアのプロレタリア戦線が成立　②有島武郎「宣言一つ」　③『無産階級』創刊　④日本農民組合組織される　⑤特集『改造』「文芸と階級意識」　⑥特集『無我の愛』「労働文学是非」　⑦『新興文学』創刊　⑧『農民運動』創刊　⑨ロシア革命五周年『前衛』『労働新聞』などが号外　⑩「労働運動と労働文学」（大杉栄）
一九二三年	①『赤と黒』創刊　②「文芸運動と労働運動」（青野季吉）　③日本発の婦人デー　④特集『新興文学』「既成文壇破壊号」　⑤関東大震災　白村遭難

誰の目にもわかるように、一九二〇年代前後の白村の文学的な営為はまさにこのような激動した社会背景下で行われたのである。これについて、藤田昌志は「厨川の生きた時代は、大正デモクラシーや『種蒔く人』（一九二一年、大正十年創刊）の運動の中で「階級」の問題が浮上して来た時代であった」[14]と指摘している。このような時代背景が白村の文学言説に広く深く浸透しているのも不思議ではあるまい。例えば『象牙の塔を出て』の第十節「露西亜」において、白村は以下のように述べている。

○現にボルシェヴキといふ言葉は、英語で書いた或本の中にMore即ち『なほ多き』を意味すとあつたやうに記憶するが、日本語は何故それを過激派と譯するものか、その理由からして私には呑み込めない。まさか何か為にする所あつて誤譯曲譯を振り廻はす乱暴ものもあるまいと思ふから、何の事やら解らぬ。ボルシェヴキに對してメンシェヴキ（少数派）があり、これは民主的社会主義の穏和派だと聞いているが、其邊の事情も詳しくは知らない。しかし若し多数黨と云ふ文字を過激派と譯するのが正當であるならば、日本でも一つ多数黨を過激派と呼んで見たら如何だ。

（『厨川白村全集』第三巻四一～四二頁）

また前出「労働問題を描ける文学」においても、古今東西の労働文学について、白村は以下のように概括している。

○昨年あたり一時は流行のやうになつていた民本主義の議論に続いて、今度は労働問題が一世の視聴を聳てるに至つた。資本家對労働者の衝突は、日本でこそ昨今の問題だが、欧州の社会では前世紀以来の最大難問であり、従つてまた文藝家の中には早くから之を主題として取扱つたものがあつた。いまかういふ類の小説や戯曲の特徴を考えて見ると、先づ（1）個人の性格や心理を寫すほかに、多数者の群衆心理を描いたものがある。殊に戯曲の場合などは登場人物の数が無闇に多い。これらの點は題材の性質そのものが然らしむる結果だ。……個人心理と働きかたを異にしている群衆心理そのものを舞臺に出す事は、近代劇のうちでも特に此労働問題を主題とした作に成功したのがある。次にまた（2）多数者の騒擾などを描けば、勢ひ場面が賑やかでセンセイショナルな、メロドラマ風の物が出来あがる。（3）描寫の態度から言へば、近代作家の常として現實をその儘に描いて、此資本労働の問題にも全く何等の解決を與へようとはせず、その悲惨な実際を描き、問題を提示して読者自らをしてこの近代社会の一大欠陥に就いて深く反省し思索せしめようとする行きかただ。（4）また結構から言へば、資本家労働者の衝突事件のなかに男女の戯や家庭内の悲劇惨話を織り込ませて、作全體のエフェクトを強く深からしめるやうな仕組みが普通だ。……（5）そして此種の作中には必ず資本家側に保守頑冥度すべからざる老人が居て、そこに新舊思想の烈

しい衝突が現されている。日本でも近頃この問題を捉へた作物がだいぶ出たが、……矢張り右に述べた最後の二つの點などは、西洋の近代文藝にあらはれたもの。（『厨川白村全集』第三巻一三一～一三二頁）

この一節に続いて、白村はさらに小説、戯曲とジャンルを分けて具体的に西欧の同盟罷工（ストト）などを描いた二十人ほどの作家・作品を紹介している。[15] しかし白村はこれらの作品を、「後年に勢力を得たマルクス一流の物質論ではなく、道徳宗教の思想を根底とした舊式のもので……その根本思想に於て既に今日の唯物的な社会主義とはよほど立場が異にしていたと共に、文藝の作品としても亦表現に於て、なほ舊時代の浪漫的の色彩の甚だ濃いものであつた……所謂『問題』小説の欽點を遺憾なく暴露したもので、藝術品として失敗の作であるのみならず、主義宣伝のためにも力が弱い」とし、決して高くは評価していない。しかもこの文章の最後では、以下のように総括している。

○或者は算盤の上から、或者は感情から、或者は理屈から、血眼になって騒ぎ立てている労働問題も、大きい人生の批評家から見れば、そこに滑稽もあれば人情もあり、むくつけき鬚男の怒鳴っている蔭には、かよわき女性の笑いや涙が見られる。冷ややかな温情主義のお隣には却って熱のある純理論が叫ばれたりする、色々の矛盾がある。高いところ大きい所から達観し観照すれば、今人の社会的生活や個人的生活は果たし何と見えるだろうか。それを文藝の作品は明鏡里の影を捉える如くに、鮮やかにまざまざと吾等に示して呉れるのだ。当面の問題解決を文藝に求めんとするが如きは、畢竟俗人の俗見に過ぎない。（『厨川白村全集』第三巻一四二頁　傍線は筆者による）

決して長いとは言えない日本プロレタリア文壇史を回顧し、その盛衰消長の経緯を改めて検証するとき、白村のこうした見解は大いに啓発的なものを含んでいると思われる。とくにこれが一九一九年十月の段階で発表した文章であることを思うと、知識人が労働問題・労働文学ないし後年のプロレタリア文学に接するとき、どうしても「感情から」「理屈から」、もっと酷い場合は「算盤の上から」になりがちである、との指摘はなかなか先見の明があるものと言わざるを得ない。なお、これらの言葉を頭に入れて中国の一九二〇～三〇年代の文壇史を再現してみると、この三つの「或者」

は創造社・太陽社のメンバーを彷彿とさせるし、「当面の問題解決を文藝に求めんとするが如きは、畢竟俗人の俗見に過ぎない」という言葉も魯迅の講演[16]を思い出させる。魯迅も文学はある意味では弱者の営みで、現実に対しては無力だ、現実を変えるものは実際の戦闘であり実際の革命であって、革命文学ではない、と主張しているのだ。ここですぐにでも魯迅の白村受容問題に入りたいところだが、その前に「畢竟俗人の俗見に過ぎない」と言い切った白村自身の「象牙の塔」を出る「苦悶」について、少しばかり指摘しておきたい。

ほぼ上記の文章と時期を同じくして書かれた短篇「藝術より社会改造へ」において、白村はまたラスキンとモリスについて、以下のように述べている。

○自分と自分の周囲とに対して、かかる思想家や藝術家が鋭い批評のまなこを向けるとき、そして生活の根本的改造の難問にぶつかる時、彼等は果たして如何なる態度を執るだろうか。自ら詩美の郷を去り、『象牙の塔』の美しい世界を出て了つて、俗衆と共に衆愚と共に手に手を執つて踊り狂ふことは、彼等の斷じて為すを欲せざるところ、また為すに忍びざるところである。そこで彼等の執る態度は、俗衆を超越し逃避した超然たる高踏的生活に向ふか、然らずんば俗衆と社會とに向つて激烈なる挑戦的態度に出でるかの二途あるのみである。

（『厨川白村全集』第三巻一七四頁）

恐らくロシアの十月革命前後、日本でも大正デモクラシー期を迎え、社会問題や労働問題で激動しはじめた時代におかれた白村も、ラスキンやモリスと同種の選択に迫られただろう。そして結果としてもラスキン、モリスらと同じく、「四十歳にして純藝術の批評から労働問題、社会批評に目を転じる」[17]ことになったようだ。雑誌『解放』に発表した「歌集・無産者を読む」[18]がその一例であったと言えよう。この時代の波と対峙している白村の姿から、「象牙の塔」を出ることに「苦悶」する白村の複雑な一面を見出すことができる。

ところでこれまでの白村論は、この「苦悶」する白村の一面に充分留意して来なかった。恐らく魯迅との関係以外に、

日本国文学として白村は殆ど研究対象にならなかったことも、その原因の一つであろう。その数少ない白村論の中でも、例えば工藤貴正が指摘するように[19]、井汲清治は「印象論と感情論から厨川白村を批評しており」、社会運動家・活動家の山川菊栄も「厨川白村の文明批評は〈要するに著者は『ちよと象牙の塔から首だけ出して』世間を罵倒して居るお殿様である、汗まみれになつて路傍や工場で働いて居る労働者とは、身分も違へば人生観も違ふだけに、その社会観は、労働者側から見れば殿様芸の大甘物で、彼是いふだけ野暮の沙汰であるが、兎に角達者な筆で面白可笑しく世相を論じた所、銷夏の読物としては適切であろう〉」と述べるなど、酷評[20]した意見が多かったという。筆者の考えでは、これらの白村論は若しかして最初から白村理解を深めることを願っていたものではなく、むしろ白村死後の「急速に消沈化」する趨勢に、拍車を掛けるものであったと言えよう。しかしほぼ同じ時期に登場し、当時の文壇に大きな衝撃を与えた有島武郎の「宣言一つ」[21]と対照して読むと、その「宣言一つ」に現れた知識人の「絶望」と、この「東せんか西せんか、北せんか南せんか」とする白村の「苦悶」とは、互いに通じるところが多いのではないかと思われる。違うのは前者がその「絶望」と真正面から戦ったのに対して、後者が終始その「苦悶」と他者的な関係に留まった点であろう。しかし文学史的な観点から見るとき、白村の労働文学論及び彼の「苦悶」が多くの同時代的な意味を含んでいることは間違いない。魯迅と有島の関係についてはまた別の機会に論じることとして、次章からは魯迅と厨川白村との関係に焦点を絞って、論じていくことにしよう。

三　魯迅と厨川白村

前述したように、魯迅と白村の関係についてはすでに多くの先行研究があげられる。ここでそうした先学の研究業績の主要な論点を見てみよう。

一．「戦士」論に埋没した「苦悶」像

『魯迅全集』[22]を見ればわかるように、魯迅自身が直接白村ないし白村の文学論に言及した文章（引言、後記、附記等）は十三篇にものぼる。これらの資料は言うまでもなく、魯迅の白村受容問題を考えるとき、大変重要な手掛かりとなる。諸先行研究もこの辺の資料に依拠するところが大きい。例えば魯迅が白村の『苦悶の象徴』の独創性を評価した下記の文章はしばしば引用されている。[23]

○作者はベルグソン流の哲学に基づき、進行して止まざる生命力を人の生活の根本であるとし、又、フロイト流の科学で生命力の根底を尋ね、文芸――とりわけ文学について説明している。しかし旧説とは少し異なり、ベルグソンは未来を予測できないとしたが、作者は詩人を先駆者とし、フロイトは生命力の根底を性欲に帰したが、作者はその力の突進と跳躍だと言う。これは現在、同類の書物の中で、科学者のような独断と哲学者のような玄虚と異なり、一般の文学論者のような繁雑さがないと言える点である。作者自身、非常に独創力があり、そのためこの本も一つの創作になっており、文芸に対して多くの独創的な見地と深い理解がある。[24]

この一節からは、確かに白村の文学論に対する魯迅の高い評価が読み取れる。また、『苦悶的象徴・引言』と「譯『苦悶的象徴』後三日序」においても、魯迅は二度「生命力が抑圧を受けるところに生ずる苦悶懊悩が文藝の根底にあり、そしてその表現法が広義の象徴主義である」[25]との白村の主張を繰り返し紹介しているので、ここが魯迅の白村に覚えた一つの大きな共感とみて間違いないだろう。相浦杲が指摘するように、[26]一九一三年と一九一七年の段階で、魯迅は白村の『近代文学十講』と『文学思潮論』を購入していたにもかかわらず、まったく無関心であった事実からも、この辺の白村の主張こそ、魯迅の共鳴を生んだものと想定される。先行研究のこの辺の指摘については、筆者も異論はない。

もう一つよく指摘されるのは、「微温、中道、妥協、虚偽、偏狭、自惚れ、保守」などの日本人の国民性的な欠陥を激しく批判した白村の姿勢に、魯迅が大いに感心したという点である。その論拠として以下の一節がよく引かれる。[27]

○この本の、ことに最も肝要な前の三篇をみると、まぎれもなくもう戦士の姿をして世に出、母国の微温、中道、妥協、虚偽、卑屈、自惚れ、保守などの世相に、ひとつひとつ、辛辣な攻撃と仮借なき批評を加えている。まことに我々外国人の眼からみても、しばしば「快刀乱麻を断つ」ような痛快を覚えて、快哉を叫ぶのを禁じ得ない。(傍線は筆者による)[28]

白村を翻訳していた時期の魯迅は、まさに北京女子大学事件で伝統文人、政府、学校当局と全面対立しており、「辛辣な攻撃と仮借なき批評」を行っていた白村に、恐らく深い共感を覚えたのだろう。もちろん、魯迅自身も『象牙の塔を出て』の後記で「私がこの本を訳したのは、決して隣人の欠点をあげつらって、いささかわが国の人々を満足させようとしたからではない」[29]と断わっているように、魯迅の「関心」はあくまでも内的なものであって、外的なものではあるまい。

このほかに、例えば『野草』に『苦悶の象徴』の影が潜んでいるということも、しばしば指摘される。[30] しかし筆者が前述した「苦悶」する白村の姿は、これらの先行研究からはまったく見当たらないのである。しかも研究者のみならず、「まぎれもなくもう戦士の姿をして世に出……外国人の眼からみても、しばしば〈快刀乱麻を断つ〉ような痛快を覚えて、快哉を叫ぶのを禁じ得ない」と白村を賞賛する魯迅自身も、この白村の「苦悶」像に気づいていないと推測されるのだ。いわば「苦悶」する白村像はこの魯迅による「戦士」論に埋没した格好になっている。これは恐らく魯迅が白村の著作を、逆時計回りの順序で閲読したことによると思われる。

二、「苦悶」埋没の原因

工藤貴正が論文「民国文壇と厨川白村」[31]においてすでに整理しているように、新聞や雑誌などに発表された論文及びその他の「序跋」「講演」などを除けば、白村の主な著書(単行本)は以下の九冊である。その発表された順で見てお

くと、以下のようになる。

①『近代文学十講』　一九一二年　三月　大日本図書
②『文芸思潮論』　一九一四年　五月　大日本図書
③『印象記』　一九一八年　五月　積善館
④『小泉先生そのほか』　一九一九年十二月　積善館
⑤『象牙の塔を出て』　一九二〇年　六月　福永書店
⑥『近代の恋愛観』　一九二二年　十月　改造社
⑦『苦悶の象徴』　一九二三年　二月　改造社
⑧『十字街頭を往く』　一九二三年十二月　福永書店
⑨『最近英詩概論』　一九二六年　福永書店

そして『魯迅全集・日記』に附されている「書帳」と照らし合わせて見ればすぐわかるように、魯迅は以下七種（『厨川白村全集』は別として）の白村の著書を購入していた。

①『近代文学十講』　一九一三年　八月　八日（＊一九二四年十月十一日に再び購入）
②『文芸思潮論』　一九一七年十一月　二日（＊一九二四年十二月十二日に再び購入）
③『苦悶の象徴』　一九二四年　四月　八日
④『象牙の塔を出て』　一九二四年　十月二七日
⑤『十字街頭を往く』　一九二四年　十月二七日
⑥『近代の恋愛観』　一九二五年　一月二二日（＊一九二五年十一月五日に再び購入）
⑦『印象記』　一九二五年　九月　九日

こうして並べて見ると、購入しなかった『小泉先生そのほか』と『最近英詩概論』の二書を除けば、魯迅はほぼ白村の著作をその刊行年順で閲読していたように見える。つまり一九一〇年代から魯迅は既に白村に関心を持っていたということになる。しかし前出の相浦杲が指摘するように、一九一三年と一九一七年の段階で、魯迅は白村著書『近代文学十講』『文芸思潮論』を購入してはいたものの、まったく無関心であった。一九二四年『苦悶の象徴』と『象牙の塔を出て』を翻訳し終えた後、購入済みの『近代文学十講』『文芸思潮論』二著を再購入している事実もそのことを示している。あるいは魯迅の白村読書歴は、ちょうど白村著作の刊行順と逆行しており、まず遺著の『苦悶の象徴』を読み、その翻訳開始後に始めて『象牙の塔を出て』を読んだことになる。そのため、魯迅の白村に対する第一印象は『苦悶の象徴』に由来するものが多く、しかも相当に強かったのである。例えば中国語訳『苦悶の象徴』の「序言」において、魯迅は「彼は性格的にたいへん情熱的で、かつて「〈若シ薬シテ瞑眩セザレバソノ疾瘳エズ〉と考え、このため自国の欠陥を痛切に非難した」と評価しており、この一句は中国語訳『象牙の塔を出て』「後記」の「母国の微温、中道、妥協、虚偽、卑屈、自惚れ、保守などの世相に、ひとつひとつ、辛辣な攻撃と仮借なき批評を加えている」という評価と非常に類似しているのである。

ところで周知のように、『苦悶の象徴』とは白村の死後、知人が編集出版した名著であるが、同書からは労働問題や労働文学などの問題で「苦悶」する白村像はまったく読み取れない。魯迅はまさにこの遺著に共感を覚えて白村像を形成し、「苦悶」する白村像はそもそも同書から消去されているのである。この日本人の国民性的欠陥を激しく批判した白村の「戦士」たる姿勢に強く共感したのは、魯迅のみではなく、これまで魯迅の「引言」「後記」などの評価を重要な資料として扱ってきた後世の研究者も、この魯迅の「戦士」関係の発言に気を取られ、白村の複雑な一面を見逃してきたのではあるまいか。少なくとも充分留意しなかったことは確かであろう。

しかし魯迅は白村に出会った初期にこそ、彼の「苦悶」に気づかなかったものの、終始それを理解しなかったわけで

はなかった。

三、「苦悶」理解の時差

『象牙の塔を出て』を翻訳し、『十字街頭を往く』も閲読し終えた後、魯迅は次第に白村の「苦悶」に気づき始めたと思われる。例えば前出の『象牙の塔を出て』の「後記」に、「だが、出てからどうなるのか？彼のこの後の論文集『十字街頭を往く』の序にその説明がある。幸い長いものではないので全文を次に引用する」[32]と前置きをした後、以下の長い引用をしているのである。

○東せんか西せんか、北せんか南せんか。進んで新しきに就くべきか、退いて古きに安んずべきか。霊の教ふる道に就かんか、肉の求むる所に赴かんか。左顧右眄しつつ十字街頭にさまよへるものこそ現代人の心である。"To be or not to be, that is the question." われ年四十を超えてなほ人生の行路に迷ふ。我が身もまたみづから十字街頭に立つものか。しばらく象牙の塔を出て書窓を去つて、騒擾の巷に立ちて思ふ所を述べよう。すべてこれらの意味を寓して、この漫筆に題するに『十字街頭』の文字を以てした。

人としての生活と藝術と、それは今まで二つの街道であつた。両方が相會して一つの広場（スクエア）に合する點に立つて、我は考へて見る。平素我が親しむ英文学で、シェリィ、バイロンでも、スキンバアンでも、またメレディス、ハアディでも、社會改造の理想をもつた文明批評家であつた。象牙の塔にのみは居なかつた。この點が佛文学などとはちがふ。モリスは實に文字通り街頭に出て議論をした。人はいふ、現代の思想界は行詰つて居ると。然し少しも行詰つては居ない。ただ十字街頭に立つてゐるのみだ。道はいくつでもある。[33]

この長い引用に続けて、魯迅はまた以下のように白村を惜しむ文章を添えている。

○もし、著者が地震で被害にあっていなければ塔外の幾多の道の中から、きっとその一本を選んで、勇往邁進してい

たであろう。だが、いまでは残念ながらそれを想像すべくもない。[34]

これらの言葉から、魯迅が次第に白村の「苦悶」に気づき、深い関心を寄せはじめていたことを、はっきり確認することができよう。『苦悶の象徴』『象牙の塔を出て』翻訳時の魯迅の筆の勢い及びそれにつづく『十字街頭を往く』からの二篇翻訳などの点から、魯迅は当初『十字街頭を往く』をも全訳するつもりだったと筆者は推測している。それがなぜ挫折したのか。この問いに答えるかのように、魯迅は前出『象牙の塔を出て』「後記」において、「この本の出版は著者が地震で亡くなった後のことで、内容は先にくらべていささか粗雑である」[35]と述べている。しかし『苦悶の象徴』も同様に遺著であるので、やはり内容ないし編集の「粗雑」さが最大の原因であろう。

しかし白村の著作にある種の不条理、或いは『苦悶の象徴』から得た白村イメージと合わないものを魯迅が感じたのは、果たして『十字街頭を往く』が最初であっただろうか。恐らく『象牙の塔を出て』収録の短篇「労働問題を描ける文学」を翻訳中に、すでにある種の違和感を感じていたことだろう。訳者「後記」でわざわざこの短篇に言及していること、またこの短篇の付録ともいえる早稲田文学社の質問に答えた文章「文学者と政治家」[36]を切り捨てていることからも察せられよう。「硬訳」「直訳」を重んじる魯迅にしては、原著の一部を切り捨てることは内心の抵抗が多かったことだろう。「後記」冒頭から除外した理由を慌ただしく説明しており、またその説明自体も「中国の現在の政客、官僚たちにこのことを説いて聞かせても、牛に琴を弾いて聞かせるようなものでしかない」[37]とやや飛躍的な内容になっているところからも、魯迅の困惑ぶりが伺えよう。

白村作「文学者と政治家」を魯迅が訳さなかったことは、白村批判の表れであると丸山昇は読み取っている。[38]しかし上述したように、筆者は『象牙の塔を出て』翻訳時点から、『苦悶の象徴』から得た整然とした白村像と矛盾するものを魯迅は感じはじめており、十分に納得できなかったからこそ、訳さなかったのではないだろうか、と考えている。この白村の「苦悶」像に対して半信半疑でいた魯迅は、『十字街頭を往く』を通読した後、やっとそれを理解できるよう

になったと考えられる。「地震でもし被害にあわなかったら、作者はきっと一つの道を選んで歩き出しただろう」と惜しむ言葉は、まさに白村の「苦悶」を理解した上での感慨でもあったように聞こえる。また一九二九年に改めて『厨川白村全集』を購入したのも、単なる記念のためではなく、それまで朦朧と感じていた白村の「苦悶」像を、より明白に理解するためでもあっただろう。

しかしここで一つ注意しておきたいことは、魯迅が「戦士」白村像とは別に「苦悶」する白村像を構築できたのは、単なる白村の著書を読んだことによる知的共感によるものばかりではないという点である。この時期から始まる革命文学論争及びその論争によって出現した中国の文壇事情も、魯迅の白村理解に大きく影響したと筆者は考えている。一九二六年以降、印刷出版事情以外にほとんど白村を論じることのなくなった魯迅が、一九三一年に行った講演稿「上海文藝の一瞥」において、突然以下のように白村に言及しているところからもその間の事情が察せられる。

○日本の厨川白村はかつてこんな問題を出している。『作家の描くところは必ず自分が経験したことでなければならないか』と。彼は自らこう答えている。『その必要はない。なぜなら作家は体察することができるからだ。従って、盗みを描くのに、必ずしも自ら泥棒をする必要はないし、姦通を描くのに、自ら私通する必要はない』と。だが、私は思うのだが、これは作家が旧社会の人物を見なれているから体察できるので、これまでその作家と関係のなかった無産階級の事情や人物に対しては、彼はきっと無能であるか、あるいは誤った描写をするに違いないのだ。(39)

この一節から、われわれは魯迅がこの時期になって、やっと立体的な白村像を構築できたことを確認できる。では、このような立体的白村像を構築した魯迅は、知識人は如何に社会改造問題に加わるべきか、という問いに直面したときに、同じくこの問題を論じていた白村の見解ないし立場から、どのように学んでいたのだろうか。

以下、こうした点に目を向けて若干の考察を行ってみたい。

四．魯迅革命文学論を支えた白村の労働文学観

丸山昇は『魯迅と革命文学』[40]において、「革命文学論戦」とは、「革命文学」を唱えた創造社・太陽社等が、魯迅・茅盾を「小ブルジョア文学者」と批判・非難したのに対し、魯迅・茅盾等が応酬して始まった論争である、と総括している。また、革命文学論争期における魯迅の文学的な態度についても、以下の五点にまとめている。

一．すべての文芸は人に読ませるものである限り、宣伝である。しかし、文学者が自分の考えをさらけ出して、それが結果として宣伝になるのであって、最初から看板を掲げた宣伝のための文学は価値がない。革命が、スローガン、標語、布告、電報、教科書……のほかに、文芸を必要とするのは、とりもなおさず、それが文芸だからである。

二．文学は必然的に時代の制約を受けるものであって、時代を超越した文学はありえず、したがって永遠の文学など存在しない。

三．永久不変の人間性は存在せず、時代により、階級により制約される。原始人の気質はわれわれには見当がつかず、われわれの気質も未来人にはわかるまい。「風にもたえぬかよわい」お嬢さんがかくのは香しい汗で、「牛の如く愚鈍な」労働者のかくのは臭い汗である。どちらの汗を描くのかによって、文学の質はちがってくる。

四．文学は所詮はなんらかの余裕の産物であり、貧乏のためにせよ革命のためにせよ、追われている時には創作などありえない。

五．文学はある意味で弱者の営みともいうべきもので、現実に対しては力は持たない。現実を変えるものは実際の戦闘であり実際の革命であって、革命文学ではない。[41]

丸山昇はさらに「一言つけ加えておくと、こうした彼の文学観が二や三の文学の階級性の認識を含めて必ずしもプレハーノフやルナチャルスキーなど、マルクス主義藝術論をふまえて成立ったものではなく、それらに接する以前にすでに彼の内部に形作られていたものであることは、念頭に置いておくべきであろう」（一一六頁）とも指摘している。「以

前」と言えば、時期的にはちょうど魯迅が白村の文学論と熱く接していた時期である。それなら、例えば『野草』などの作品に『苦悶の象徴』の影が確認できるように、革命文学論争中に示された魯迅の文学観の中に、「象牙の塔」の玄関でさまよう白村の足跡を見出すことはできないだろうか。

○すべて思想家や学者や藝術家がある目的のために宣伝なぞをする物だ、と思ふのは大間違ひである。即ち世間といふものを最初から眼中に置いて、ある目的のために世間へ自分の思想を弘布するのに、学問や藝術品を利用したり道具にしたりする、そんな事も個より結構ではあらうが、それが藝術家や思想家の本来の職能だと思ふならば、根本的に謬見だ。……しかし、われは藝術家である、創作はしたが婦人運動の宣伝をした積りはなかった、と答へたイブセンといふ男はやつぱり偉い。これだけの心がけがあつたればこそ、その自然の成行きに於て立派な宣伝者ともなり、……学者なぞは、また理屈のつけやう次第で説教屋、広告屋が任務だ、とも言へば言へるだらう。ただ独り藝術家に至つては、苟も宣伝なぞの広告根性を抱いているようでは、決して立派な創作も出来ないし、また藝術家そのものの本質をも傷つけているわけだ。(42)

○然るに今や時勢は急変して物質文明の盛んな生存競争の烈しい世の中になつて、人の心には一時一刻と雖も實人生を離れて悠遊するだけの余裕がなくなった。人々は現実生活の圧迫を一層痛ましく感ずるに至つた。人生当面の問題が行住坐臥つねにその脳裏を往来して心を悩ましている。そこで遂に文藝ばかりがいつまでも呑気な事を言っているわけにも行かず、勢現在生存の問題に密接な関係を持つ事になつた。眼前焦眉の急に迫って人々を悩ましめている社会上宗教上道徳上の問題が直ちに文藝上にと取扱はれる程までに、實生活と藝術とは接近した。(43)

○われわれには生命力の余裕があって、其力によって、もっと完全な調和を得た自由な天地を求めようとする。即ち官能と理性、義務と意向とがうまく調和された別天地を求める。それが遊戯だ。その遊戯衝動から藝術は起るので、遊戯は即ち實生活を超越した假象の世界である。かくの如き境地を名づけて『美の精神』と呼ぶ。……人間でも動

物でも精力に余剰があると、それを自分の意の儘に外に出さうとする。……之を藝術との関係に於て見るとき、私どもには色々の問題を暗示する。……藝術といふものの人間生活上の意義から考へて、上述の二説は両立し得べきのみならず、この二説を併せて始めて遊戯としての藝術の真意義をも説明し得るのではないかとさへ思ふ。……この余裕を以てわれわれは更に現在よりも、もつと自由な、もつと調和を得た、もつと美しい、より良き生活を創造しようとするところに、向上もあれば進歩もある。単に藝術ばかりではなく、一般に思想生活は皆すべて此意味に於て厳粛なる遊戯である。……この遊戯のあるところに創造創作の生活が出来る。[44]

なるべく短く整理しようとしたが、やはり長い引用となってしまった。しかしこのような白村の議論を読むと、文藝と宣伝の関係、文学と現実生活との関係、文学と余裕のある環境との関係に対する魯迅の態度は、白村のそれとかなり一致していることが理解できる。また、少し繰り返しになるが、前出白村の「当面の問題解決を文藝に求めんとするが如きは、畢竟俗人の俗見に過ぎない」という見解も、「文学はある意味で弱者の営みともいうべきもので、現実に対しては力は持たない」とする魯迅の姿勢とも通じていることが一目瞭然である。革命文学論争の最中の一九二九年の段階まで、魯迅はずっと白村の著作に関心を示し続けていたという事実を考慮すれば、これはただの偶然とは言い切れない。

ところで、長堀祐造が「一九二八～三二年における魯迅のトロツキイ観と革命文学論」において詳しく検証し、指摘しているように、丸山昇がまとめた魯迅の革命文学論争時の五つの特徴は「すべてトロツキイ理論と無縁ではない」。[45] そもそも魯迅が購入したプロレタリア文学に関する最初の著書がトロツキイの『文学と革命』であったのだ。しかし『文学と革命』の購入は『苦悶の象徴』のみならず、『象牙の塔を出て』の翻訳も終わった後の一九二五年八月二十六日であるので、魯迅の読書歴順で並べるなら、トロツキイより白村の方が先である。その後の魯迅における白村とトロツキイの占める地位の問題については別として、前述の文藝と宣伝、現実生活、余裕のある環境との諸関係をめぐる魯迅思想の起点はやはり白村に置くべきであろう。つまりこの時期の魯迅は、文藝理論の基本において白村を援用し、それ

を補強するためトロツキイの革命文学論を援用したのである。[46] 本節を「魯迅革命文学論を支えた白村の労働文学観」と命題したのも、その意味である。

しかしこの点に関しては、丸山も「何か他の目的に従属する文学は無価値だとする考え方自体は、魯迅の独創でも、特に珍しいものでもなく、たとえば魯迅が訳した厨川白村あたりも含めて、すでに広く見られる型のものであるといっていい」[47]と指摘している。筆者が再びここに目を向けたのは、魯迅の「苦悶」する白村理解への道のりは、決して丸山の言うように一言で片付けられるほど平坦ではなかったと思うからである。

ここでもし白村文学論と革命文学論の間に、一つの大きな断絶ないし転換点を見出せるなら、誰よりも白村文学論に惹かれ、また実質上革命文学論争の中心でもあった魯迅において、この二つの文学論はどういう関係を切り結んでいたのかという、本論の冒頭で述べた問題を思い出すべきであろう。言葉を急ぐと、一九二四年から一九三一年までの魯迅および中国近代文学の思潮は、上述のように、厨川白村文学論、トロツキイ文学論、革命文学論、プロレタリア文学論とつながっていたのである。言い換えれば白村の労働文学に関する議論及び彼がその時期に抱いていた「象牙の塔」を出る「苦悶」とは、魯迅の視線を日本プロレタリア文学へと引っ張った諸要素の一つでもあったといえよう。少なくとも魯迅の関心がその後次第に日本プロレタリア文学へと引っ張られて行くプロセスにおいて、大いなる前史的な役割を果たしたと筆者は見ている。内容的には、トロツキイの『文学と革命』が魯迅が購入した最初のプロレタリア文学に関するものであるが、しかし書名に明白に「無産階級」という文字が入っているプロレタリア文学に関する著書の最初の購入例は、やはり『無産者文化論』[48]であり、その時期とはまさに『象牙の塔を出て』の全訳を終えた後の一九二六年二月二三日である。また、前出白村の「描寫の態度から言へば、近代作家の常として現實をその儘に描いて、此資本労働の問題にも全く何等の解決を與へようとはせず、その悲惨な実際を描き、問題を提示して読者自らをしてこの近代社会の一大欠陥に就いて深く反省し思索せしめようとする行きかただ」との見解が、魯迅の「小説を書かれるとのこと、ま

ことによいことです。実情を書くなら、中国にとって有益であり、是非曲直をはっきりさせてその障蔽をとり除く、それが公平であります」[49]との見解と通じている点も興味深い。なぜなら、それは白村が否定的に捉えている労働文学の様式を、魯迅は肯定的に推し進めているからだ。前述したように、丸山昇は「文学者と政治家」を訳さなかったことに、魯迅の白村批判を読み取っているが、その批判の意味を筆者はむしろここから読み取るべきだと思っている。そして、さらに一歩踏み込んでなぜこのような魯迅の白村批判が可能になったのかと問い詰めていくと、やはり魯迅の前出の有島武郎「宣言一つ」との出会いが、無視できなくなってくると思われる。これに関しては、前述のように、また別稿で検討したい。

四、おわりに

日本留学「当時は（日本文壇に対して――陳注）少しも注意せず、森鴎外、上田敏、長谷川二葉亭等、殆どその批評や訳文のみを重んじ……島崎藤村等の作品に至っては終始問題にしたことはなく、自然主義文学盛行時にも田山花袋の小説〈蒲団〉を読んだだけで、あまり興味は感じなかった」[50]という周作人の証言は有名である。恐らく「一、怎样才是理想的人性？二、中国民族中最缺乏的是什么？三、它的病根何在？」[51]という問題を必死に考え、その解決策に急いでいた魯迅にとっては、当時の日本文壇（より正確にいうと、魯迅が当時理解できていた日本文壇）は、大した魅力を有していなかっただろう。しかし「微温、中道、妥協、虚偽、偏狭、うぬぼれ、保守」などの日本世相を激しく批判した白村のエッセイや時評などは、まったく違う性格で魯迅の前に現れたはずだ。素早くその翻訳に取り掛かり、しかもその訳文が予測以上の反響を呼んだとき[52]、魯迅は一層白村の力を信じるようになったと思われる。同時に、この「白村効果」はまた確実に魯迅の日本文壇に対する見方を変えていったように見受けられる。「ポスト白村」時代の魯迅文藝理論の構成の歩みを示している『壁下訳叢』[53]と「訳叢補」に収録されている作品は、「ロシアのケーベルを除いて、いずれも

日本人」[54]である事実も、この時期の魯迅の日本文壇思潮への関心のあり方を表している。従前の「あまり興味は感じなかった」という態度と比べれば、これは百八十度の変化ともいえよう。ある意味では白村こそ、魯迅の日本文壇思潮に対する関心を決定的に引起こした最も重要な人物であったと筆者は考えている。後年、魯迅の視線が次第に日本プロレタリア文学へと移っていったのも、この流れから逸れるものではない。

しかし白村の経歴を理解している人なら容易に気づくと思うが、白村の労働文学論及び彼の「象牙の塔」を出る「苦悶」は、あくまでも傍観的或いは他者的であって、白村自身の内在的な問題とはなっていない。だからこそ、中国国内の革命文学論が勃興する以前、白村の労働文学論だけで魯迅の関心を日本プロレタリア文学へと向かわせることはできなかったのである。

注

(1)『苦悶の象徴』(厨川白村著　改造社　大正十三年)。ただし本論における引用及びその他の言及は『厨川白村全集』(改造社　昭和四年二月)第二巻の収録に準じる。以下略。

(2)藤田昌志「魯迅と厨川白村」(『中国学志』　一九九〇年)。九九頁。以下同。

(3)中国における厨川白村の受容研究――とりわけ魯迅との関係を研究した論文はすでに多く見られる。本論の執筆に当たって、主に以下の先行研究業績を参考にした。

①「魯迅と厨川白村」(丸山昇　『魯迅研究』二一号　一九五八年)

②「魯迅と厨川白村」(楠原俊代　『中国文学報』二六号　一九七六年)

③「魯迅と厨川白村」(張華〈鶴田義郎訳〉『海外事情研究』第十巻第一号　一九八〇年)

④「厨川白村と一九二四年における魯迅」(中井政喜　『野草』第二七号　一九八一年)

⑤「魯迅前期美学思想与厨川白村」(温儒敏　『北京大学学報』第八七期　一九八一年)

⑥「魯迅と厨川白村」(相浦杲〈『伊地智善継・辻本春彦両教授退官記念　中国語学・文学論集』　一九八三年十二月)

⑦「『苦悶的象征』和魯迅的文芸心理思想」（程麻『福建論壇』一九八六年）
⑧「魯迅と厨川白村」（藤田昌志『中国学志』一九九〇年）
⑨「厨川白村與中国現代作家」（梁敏児『中国文学報』一九九六年）
⑩「厨川白村与中国現代文芸理論」（王向遠『文芸理論研究』一九九八年）
⑪「厨川白村与中国現代文学里的神秘主義」（梁敏児『中国文学報』一九九八年）
⑫『民国翻訳史における西洋近代文芸論受容に果たした日本知識人の著作に関する基礎的研究』（工藤貴正　平成十五～十八年度科学研究費補助金（基盤研究〈C〉）研究成果報告書　二〇〇七年三月）

（4）厨川白村の『苦悶の象徴』と魯迅の『野草』の関係については、藤田昌志が前出「魯迅と厨川白村」の「結語」の部分で触れており、相浦杲も「关于魯迅的散文诗集《野草》」（『辽宁大学学报』一九八四年　宿玉堂　能勢良子译）において詳しく論じている。

（5）『厨川白村全集』第三巻所収「十字街頭を往く」「序」。二一一頁。

（6）藤井省三著『魯迅――「故郷」の風景』（平凡社選書一〇〇　一九八六年十月）。一〇〇頁を参照。

（7）『近代文学研究叢書』（第二二巻）（昭和女子大学近代文学研究室編　一九七二年三月）を参照。二七六頁。なお、本節における引用は、とくに注を付けていない場合、何れも同書によるものである。厨川白村の伝記に関しても、主にこれを参照した。

（8）藤田昌志は前出「魯迅と厨川白村」において、「……厨川には当然、敵も多かったであろうし、又、傲慢である、と言う批判もあった」（九二頁）と指摘している。筆者も白村の文献資料からは「傲慢」たるイメージを読み取ることができる。

（9）この一句は同じく前出の『日本近代文学研究叢書』からの引用であるが、恐らくその出典となっているのはエッセイ「左足切断」（『印象記』所収、『厨川白村全集』第四巻四四七頁）であると思われる。

（10）『厨川白村全集』（前出）第三巻所収『象牙の塔を出て』より引用。五四頁を参照。

（11）雑誌『改造』（大正八年十月号）を参照。後に『象牙の塔を出て』に収録。本論における引用は『厨川白村全集』第三巻に準ずる。一三一頁。

（12）『厨川白村全集』（前出）第三巻所収『象牙の塔を出て』より引用。五五～五六頁参照。

（13）ここの年表作成に際して、主に以下の資料を参考とした。一．『日本プロレタリア文学大系』（三一書房　一九五五年）二．

『日本文学新史』（『国文学解釈と鑑賞　別冊』昭和六十一年）三.『大正文学史』（臼井吉見著　筑摩書房　昭和三十八）四.『近代日本文学評論史』（有精堂　昭和三十三）五.『日本史年表』（歴史学研究会編　岩波書店　一九七六年）六.『プロレタリア文学研究』（稲垣達郎監修　芳賀書店　昭和四十一）。

(14)　藤田昌志「魯迅と厨川白村」（前出）を参照。七九頁。

(15)　『厨川白村全集』第三巻「労働問題を描ける文学」を参照。下記の引用は一三四頁より。

(16)　「革命時代の文学」を参照。『魯迅全集』第三巻所収。

(17)　『象牙の塔を出て』一七五頁。

(18)　『解放』（一九二〇年四月号）を参照。

(19)　工藤貴正「厨川白村著作の普及と受容　――日本における評価の考察を中心に――」（『学大国文』四四号　大阪教育大学）を参照。一〇九～一一二頁

(20)　山川菊栄のみならず、同時代のプロレタリア文学者たちの間では、これが一般的な反応だったと言えよう。ところが魯迅はなぜ白村を否定的に読まなかったのだろうか。前者がいわゆる「状況論」として読んだのに対して、魯迅は「原理論」として読んだという違いがあったように思われる。

(21)　有島武郎が大正十一年一月雑誌『改造』に発表した評論。ロシア革命の影響により労働運動の激化した社会状勢のもとに書かれたこの評論は、知識人がどういう姿勢でいわゆる第四階級にかかわるのか、という問題を有島が議論したものである。社会運動における知識人の「苦悶」をありのままに書き出した評論として、当時の文壇に大きな衝撃を与えた。

(22)　本論における魯迅作品の日本語訳は全て『魯迅全集』（学習研究社　昭和六十年）に準ずる。

(23)　丸山・藤田・相浦諸氏は皆この評価を重視し、それぞれの論文において引用している。引用は各論の二〇頁、八一頁、三三頁を参照。

(24)　『魯迅全集』第十二巻。三〇〇頁を参照。

(25)　『魯迅全集』第十二巻。三〇〇頁と三〇三頁を参照。

(26)　相浦杲は論文「魯迅と厨川白村」（前出）において、「魯迅が一九二四、二五年ごろ白村の著書に強い興味と関心を示していた」とした後、その理由について、以下のように述べている。

◎白村の死より十年前、魯迅は一九一三年夏、……八月八日の『日記』に……日本語の『近代文学十講』一冊……を受取る。……と記している。しかし、年末ごとにその年の購入書をまとめて記入しているリスト――「書帳」（癸丑書帳）にはこの書名の記載がない。……『文芸思潮論』についても、一九一七年十一月二日の『日記』に……東京堂の手紙ならびに『文芸思潮論』一冊を得たり。とある。が、なぜか一九一七年末の書帳にもこの書物の記載は落ちている。」六～七頁を参照。

(27) 前掲諸先行研究の中で、この一節の魯迅評価を引用する論文は多い。丸山論文（二一頁）、工藤論文（五五頁）、楠原論文（一〇二頁）、温論文（三六頁）、王論文（四二頁）、中井論文（二一二頁）など参照。

(28) 『魯迅全集』第十二巻。三〇九頁を参照。

(29) 『魯迅全集』第十二巻。三一〇頁を参照。

(30) 藤田昌志「魯迅と厨川白村」（前出　九〇頁）と、相浦杲「魯迅の散文詩集『野草』について　――比較文学の角度から」（『国際関係論の総合的研究』大阪外国語大学一九八三年三月）を参照。

(31) 工藤貴正「民国文壇と厨川白村　――『近代の恋愛観』の受容を中心に」（『現代中国』第七五号）を参照。四三頁。

(32) 『魯迅全集』第十二巻を参照。三〇〇頁。

(33) 『魯迅全集』第十二巻を参照。三〇〇頁。

(34) 『魯迅全集』第十二巻を参照。三〇〇頁。

(35) 『魯迅全集』第十二巻を参照。三〇八頁。

(36) 初出は一九一九年の『早稲田文学』特集「文芸家と為政者との接触を如何にみるか」を参照。本論においては『厨川白村全集』第三巻所収の「文学者と政治家」に準ずる。一四三頁。

(37) 『魯迅全集』第十二巻を参照。三〇七頁。

(38) 丸山昇は「魯迅と厨川白村」（前出）において、以下のように論じている。二七頁を参照。

◎魯迅は「象牙の塔を出て」を訳す時、その中にあった「文学者と政治家」という文章だけは抜いている。魯迅はその理由についてこう言う。

「大意は、文学と政治とは、ともに民衆の深い厳粛な内的生活の活動に根ざすものである。従って文学者は必ず実生活の地盤に立つべきであり、政治家は必ず文芸を深く理解し、文学者と接近すべきである、というものである。私はこれはまことに

道理があると思う。だが中（「国」という一字が脱落していると思われる〈丸山注――陳注〉）の現在の政客・官僚達にこの事を説き聞かせるのは、牛に向って琴を弾くものだ。両者の接近ということなら、北京ではいつでもあることだ。幾多の醜態と悪行が、すべてこの新しい暗黒の影の中で演ぜられているが、作者のいうような立派な看板など思いもよらない。」

魯迅はこれだけしか言っていないが、私はこゝに白村に対する魯迅の批判を読み取るのだ。

（39）『魯迅全集』第六巻を参照。一二八頁。

（40）丸山昇著『魯迅と革命文学』（紀伊国屋書店　一九七二年一月）を参照。六七頁。

（41）丸山昇著『魯迅と革命文学』（前出）を参照。一一五～一一六頁。

（42）『厨川白村全集』第五巻「近代の恋愛観」を参照。二四三頁。

（43）『厨川白村全集』第三巻「巻頭に」を参照。五～六頁。

（44）『厨川白村全集』第三巻「象牙の塔を出て」の「遊戯論――国展の機関雑誌『制作』のために」を参照。一二四～一二八頁

（45）長堀祐造「一九二八～三二年における魯迅のトロツキイ観と革命文学論」（『慶応義塾大学日吉紀要』一九九五年）を参照。引用は九六頁。

（46）長堀祐造は前出論文の末尾で、以下のように述べている。「〈　〉内の数字は本論にも引用してある丸山昇が魯迅の革命文学論争期の基本的な態度を五つにまとめて示した順番である――陳注」

◎〈1〉～〈3〉についてはトロツキイ理論の直接的投影を抽出することは困難だが、〈4〉〈5〉については明らかに「革命時代的文学」以来のトロツキイ理論の影響とみなされ得るのである。とすれば翻って〈1〉～〈3〉を見る時、トロツキイの間接的、部分的影響の可能性をそこから完全に排除することもまた無理があると言わなければならない。」（九六～九七頁）

同論文全体の緻密な実証と比べて、上に引いた考証がやや説得力に欠けている点は否めない。証拠を「抽出することに困難」を感じた著者の不安感さえ読み取れる。しかし筆者の考えでは、魯迅のこの辺の文学的態度ないし姿勢を、全部トロツキイの文学論に即して証明しようと苦心するよりは、むしろ白村の文学論と併せて考察すべきだと思う。それは魯迅のトロツキイへの目線が白村の文学論を経由している可能性が高いからだ。

（47）丸山昇著『魯迅と革命文学』（前出）を参照。一一七～一一八頁。

（48）『無産者文化論』（トロツキイ著　武藤直治訳　大正十四年　聚芳閣）と思われる。一九二六年分の『日記・書帳』を参照。

同年六月に、また『無産階級藝術論』（ボグダノフ著　麻生義訳　大正十五年　人文会出版部）をも購入している。それまで題目に「無産階級」という字が入っている書物が「書帳」から見当たらないので、魯迅の「無産階級」問題への関心は確かにこの時期からと予想される。なお、この時期には創造者や太陽社からの例の「魯迅攻撃」もまだ始まっていないので、当時の魯迅の読書ルーツからみて、白村の労働文学論などがそれなりに魯迅に響いたということが充分考えられる。

(49) 『魯迅全集』第十五巻を参照。二五〇頁。

(50) 周作人「魯迅に関しての二」を参照。本論における日本語訳の引用は丸山昇論文「魯迅と〈宣言一つ〉」（『中国文学研究』第一号　一九六一年　一頁）に準ずる。

(51) 許寿裳著『我所认识的魯迅』（人民文学出版社　一九五三年）より。

(52) 魯迅訳の『苦悶の象徴』と『象牙の塔を出て』は当時大ベストセラーとなり、前者は十二版に達し、後者も十版を重ねた。

(53) 魯迅が一九二四年～一九二八年の間に翻訳した文藝理論に関する論文集である。一九二九年四月上海・北新書局出版。「訳叢補」は魯迅の死後、未亡人許広平らによって編集され、完成した訳文集である。後に『魯迅全集』（魯迅先生記念委員会　中華民国二七年）に収録。

(54) 『魯迅全集』第十二巻を参照。三四九頁。